

●平成30年度推薦入試Ⅰ入学試験についての講評

1 小論文

(1) 方法

課題文では、まず、宮崎市における人口の推移を示す図と都道府県別の人口増減率を示す図の2つの図を提示した。次に、これら2つの図を参考に、近い将来の日本で、ますますその傾向が顕著になると思われる人口の地域間格差の問題を取り上げ、そのことが私たちの社会にどのような変化をもたらすのかについての予想とそのことについてどのように考えるかを問うた。

この課題文は、本学のアドミッション・ポリシーに則り、本学が立地する宮崎市をはじめとする地域の現状から日本全体にとっての課題を見だし、それらの探究と解決を主体的に考えられる姿勢を持っているかどうか、さらには同様の課題を広く国際社会にまで視野を広げて考えることができる余地があるかどうかについて確認することを目的に作成された。

(2) 結果に関する評価

評価のポイントは、①地方の人口減少と大都市への人口集中という2つの現象を総合的に捉えられているかどうか、②現状から推測される将来の状況と課題を客観的に述べ、それらを踏まえた上で自身の考えが述べられているかどうか、③自身の考えを述べる上で、その理由や根拠が明確になっているかどうか、であった。

そのため、中山間地域の過疎問題に対するありきたりな考察に終始し、宮崎市のような中都市でさえ人口が減少しているという事実や大都市への人口集中についても課題があることなどの視点が欠落している論文は、課題文を適切に理解しているといえないことから低い評価となった。このように、いくつかの頻出される典型的な小論文課題に対する模範的な文章パターンを予め準備しており、それをそのまま課題文に沿うように無理矢理当てはめたような記述の論文がいくつか見受けられたが、そのような対策は不適切といえる。また、段落分けが不適切、極端に字数が少ない、誤字脱字が多い、など文章の基本が守られていない論文や、課題について論じるのではなく、課題に絡めて本学への志望動機を述べるなど、そもそも小論文とは何かについての理解が不足していると思われる論文も見受けられ、こうした論文も低い評価となった。

一方、自身の経験を踏まえたり、あえて人口の地域間格差のポジティブな側面を見いだそうとしたりする(課題文には必ずしもネガティブな現象であるとする記載はない)など、独自性が高く、先入観にとらわれない論文については高い評価が与えられた。

2 グループ面接

(1) 方法

事前(受験票送付の際)に、課題に関する「キーワード」を提示し、キーワードについて十分勉強してきたという前提で、自分の意見を理解しやすい形で発表できるか、グループ討議に建設的に参加しようとしているか、対立軸を設定して双方の立場から適切な状況把握ができるか、などの観点で評価した。

今回は「労働者の長時間労働を是正することが私たちの生活にもたらすメリットとデメリット」を討論の課題とした。

事前に送付したキーワードは、「働き方改革、サービス残業、ワークライフバランス、24時間営業、労

働力不足」であった。

(2) 結果に関する講評

評価基準は、①表現する力（キーワードの的確な理解を前提に自分の意見を論理的かつ的確に伝える力）、②面接の態度（他人の発言を十分に理解できるよう真摯に聞き、積極的にかつ意欲的に討論に参加する態度）、③適性（議論の展開を進展させる発想、対立軸となる考え方を踏まえた多角的検討力など）である。

結果的には、例えば、次のような受験生は高く評価された。①キーワードについてしっかりと学習し、キーワードを活用しながら、わかりやすく発表している。②対立軸になっているメリットとデメリットをバランスよく説明して、それをもとに議論を進展させている。③他の受験生の意見をしっかりと聞いて、議論の流れに沿って意欲的に発言したり、議論の展開に貢献する発言をしている。④聞き取りやすい口調で発言する・聞き手を見ながら発言する・発表用紙を他の受験生に見やすいように提示するなど、自分の意見や考えを伝えよう、理解してもらおうという工夫が見受けられる。

一方、例えば、次のような受験生はあまり高い評価を受けられなかった。①キーワードについての準備が不十分だと感じられる。②与えられたキーワードとは別の新たなキーワードを持ち出して、そのキーワードの説明をしないまま自分の意見を述べる。③対立軸になっているメリットとデメリットのうち、一方にしか触れていない。④与えられた課題がきちんと理解できていない状態で意見を述べる。結果的に、テーマから外れ、論理的な説明ができない。⑤突然、議論の流れとは無関係な発言をする。⑥与えられた時間を有効活用できず、結果的に発言の回数と時間が少なくなってしまう。

次年度の推薦入試Ⅰのための準備の段階では、上述のことを注意して頂きたい。

3 個人面接

(1) 方法

1人約20分で面接を行った。評価の基準は次の3点であった。

① 表現する力

自己推薦書やアピール・ポイントの内容をわかりやすく表現しているか。

自分の考えを面接員の質問に応じて理解しやすい形で表現しているか。

② 面接の態度

相手の発言を真摯にきく態度であるか。

対話に参加しようとする姿勢であるか。

③ 適性や意欲

入学への真の意欲があるか。

「大学案内」などによってカリキュラムの内容を理解しているか。

(2) 結果に関する講評

上記の3つの基準を踏まえて評価した。その結果、面接員のコメントは下記のようなものであった。

① 「表現する力」に関するコメント

まず、自己推薦書やアピール・ポイントの要点をわかりやすく説明することが求められるが、何を書いたか忘れてしまい、ちぐはぐな説明をする受験生が散見される。準備の段階でご注意頂きたい。また、その内容についての質疑応答では、質問をきちんと理解して的確に答えた受験生、具体的に分かりやすく答

えた受験生には高い評価が与えられた。その際、準備してきたことだけを述べていては、答えとして不足してしまう。この点にも注意が必要である。さらに、「これまでの学習や活動」、「本学での学び」、「大学卒業後・将来の目標」の3つの関連性を分かりやすく説明できると高い評価につながるようだ。

② 「面接の態度」に関するコメント

面接員は受験生との対話を通して答えを引き出そうとしている。したがって、積極的に対話しようとする受験生の態度は高評価を受ける。時には、面接員から予想もしない質問が出ることもあるかもしれないが、臨機応変に対応できれば高い評価につながる。緊張の余り、質問の内容がうまく理解できなかった時は、正直に聞き返しても構わない。また、「以上です」という文言で発言が終わることで、対話が閉ざされるような印象を抱く面接員もいるようである。減点にならないにしても、ご注意頂きたい。

③ 「適性や意欲」に関するコメント

何よりも、本学へ入学したいという意欲が感じられることが重要であるが、それに見合うだけの本学の知識も求められる。アドミッション・ポリシー、カリキュラム、学びの特色（リベラル・アーツ教育など）について、また、学びたい科目やゼミ、教養課程（グローバル人材養成プログラムと現代教養科目群）と専門課程（言語・文化、メディア・コミュニケーション、国際政治経済という3専攻）などの理解は不可欠である。その知識不足が露呈するようでは、決して高い評価を受けられない。当然のことだが、キャンパスガイド（オープンキャンパス）への参加について、また、なぜ他大学でなく本学を選ぶのかという理由についても問われることがある。これらのことにきちんと答えられると高い評価を受けるようである。